

地域情報（県別）

【静岡】人工関節センター開設で、手術件数が前年の約2倍に増加-遠藤浩一・聖隷富士病院人工関節センターセンター長に聞く◆Vol.2

2025年度の人工関節手術件数は120件に達する見込み

m3.com地域版

聖隷富士病院（静岡県富士市）では、高齢化が進む地域における人工関節治療に対する多様なニーズに応えるために2025年4月に人工関節センターを開設。センター長を務める遠藤浩一氏に、開設から9カ月たったの地域での反応や現状の課題、今後の展望を聞いた。（2026年1月19日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



遠藤浩一氏

開業医を1軒ずつ訪問し、地域の課題把握と病診連携を強化

——人工関節センター開設にあたり、どんな課題がありましたか。

最大の課題は、当院で人工関節手術が可能であることをいかに周知するかでした。地域住民の方々だけでなく、開業医の先生方に安心して患者さんを紹介していただく必要がありました。そのため、開業医の先生方へ1軒ずつごあいさつに伺い、地域の課題を伺いつつ、当院の体制や治療方針を丁寧に説明しました。こうした地道な取り組みにより地域の先生方と協力しながら、地域の患者さんに理想的な人工関節治療を提供できるようになってきていると実感しています。

また、当院で人工関節手術を受けた患者さんからの紹介で来院される方も少なくありません。手術前は足をひきずっていた方が痛みなく普通に歩かれている姿を見て、自分も痛みから解放されたいと当院への受診につながっているようです。手術された方の多くは、「長年悩まされていた股関節や膝関節の痛みから解放され、日々の生活が楽しくなった」と言って喜んでいただいています。

——人工関節手術の年間件数はどのように推移していますか。

私が当院整形外科に異動した2024年5月以前は年間10件程度で、非常勤医師が執刀していました。初年度は整形外科として年間69件の人工関節手術がありました。人工関節センター開設後は順調に件数が増加し、2026年3月までの予約分を含めると、前年の約2倍に達する見込みです。予想以上の手術件数となり、今後も地域の開業医の先生方との連携を強化し、患者さんが安心して人工関節手術を選択できる環境づくりに努めたいと考えています。

●2024年度

2024年5月～2025年3月：人工関節手術 計69件（THA30件・TKA34件・UKA5件）

●2025年度

2025年4月～2025年12月：人工関節手術 計89件（THA43件・TKA44件・UKA2件）

2026年1月～2026年3月（2025年1月19日時点での予約）：人工関節手術 計38件（THA25件・TKA13件）

※THA＝人工股関節置換術、TKA＝人工膝関節置換術（全置換術）、UKA＝人工膝関節置換術（部分置換術）

——人工関節センターを受診する患者層を教えてください。

当センターの患者層は60代・70代が中心で、これまで51歳から89歳までの方が人工関節手術を受けられました。お住まいの地域は富士・富士宮地域の方が8割程度ですが、沼津、伊豆、静岡など近隣地域からも多くの方に受診していただいています。

また、新幹線の新富士駅からタクシーでアクセスできるので、患者さんからの紹介などで浜松や東京から受診する方もいます。手術を受けた患者さんを取っているアンケートでは、多くの方が「手術前の痛みで悩んでいた日々がうそのようで、もっと早く手術をすればよかった」と満足していただいています。



人工関節センターを担うスタッフ

富士市立中央病院、富士整形外科病院などの医療機関とも病病連携を促進

——富士市内の富士整形外科病院でも2025年6月に人工関節センターを開設しています。どのように連携していますか。

富士市内で人工関節手術を行っているのは、富士市立中央病院、富士整形外科病院、そして当院の3施設です。これまで人工関節手術を行ってきた2病院と定期的に情報交換をさせていただき、3施設で協力して地域の患者さんの受け入れができていているように感じています。

例えば、富士整形外科病院は整形外科単科病院という強みがあり、当院で対応が難しい場合に紹介させていただくことがあります。逆のケースでは、内科疾患や透析中の患者さんなど当院での管理が適している場合には紹介していただくこともあります。また、富士市内の基幹病院である富士市立中央病院は高度医療急性期医療を担っているため、骨折などの外傷も含め、当院で対応が可能な患者さんを紹介していただいています。日常的に周りの病院間で情報交換しながら地域医療を提供し、とても良い関係で仕事をさせていただいています。

——センター開設から9カ月が経ちました。現在の課題を教えてください。

患者数の増加に伴い、医師・看護師・コメディカルを含めた体制強化が求められます。現在は私が執刀の中心を担っているため、リスク管理の観点からも複数の執刀医が必要です。現在、高リスク症例では、バックアップ体制の整った聖隷浜松病院で手術を行うこともあります。

2026年4月から、人工膝関節の専門医と若手整形外科医の2人が常勤として着任予定で、体制は大きく強化されます。現在、初診から手術までの待機日数が約3カ月となっていますが、患者さんがなるべく早く手術を受けられるよう、2026年4月から人工関節の手術日を週2日から週3日と増やすことになりました。看護師やリハビリスタッフの確保も重要で、当院の特色を発信しながら若い人材に魅力を感じてもらい、患者さんのために楽しくやりがいを感じながら仕事をできる環境づくりを進めています。

2025年には看護・リハビリスタッフ向けに3回の勉強会を開催し、人工股関節・膝関節置換術の術式や合併症への理解を深めてもらいました。看護師もリハビリに積極的に関わるようになり、リハビリスタッフが自主的に人工関節術後のリハビリ冊子を全面改訂するなど、とても心強く、逆に私が助けられていると感じています。

——最後に、今後の展望を聞かせてください。

ここまで来れたのは、自分を成長させていただいた方々との出会いのおかげだと思っています。今後はその恩返しとして、自分が生まれ育った静岡県東部で患者さん一人一人に安全で質の高い人工関節手術を提供していきたいと考えています。そのために、地域の開業医や病院の先生方とさらに連携を深めていきたいです。地域の方々の痛みのない生活・健康寿命の延伸のために貢献できるよう、これからも誠実に取り組んでいきます。

◆遠藤 浩一（えんどう・こういち）氏

2016年に東海大学医学部を卒業後、聖隷浜松病院で初期臨床研修を修了。その後、同院で整形外科医として勤務。2024年5月に聖隷富士病院に赴任し、2025年4月に人工関節センターセンター長に着任。日本整形外科学会整形外科専門医、運動器リハビリテーション医・リウマチ医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター。

【取材・文＝鈴木 俊輔】（写真は病院提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

